受賞のことば

佐怒賀正美

今回、私の第七句集『無二』に協会賞をいただくことができ、とてもうれしく光栄に思っています。私の句集を推薦してくださった方々、選考委員の方々、ほんとうに有難うございました。そして、これまで私を育て支えてくださった方々に心から感謝申し上げます。学生時代から俳句を続けていたことが、ようやく報いられたようにも感じています。

私の俳句の出発点は、中学生の時の国語の先生が俳人・牧辰夫であったことです。階段の踊り場の黒板に毎月短歌三首、俳句三句を書き写す作業が私の係でした。この中には地元の長塚節の短歌もありました。〈たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども〉など何度も口遊んでいると、軽妙な調べに魔法のように吸い込まれていきました。

そののち、学生になってから石原八束、有馬朗人という二人の俳人に接してさらに俳句にのめり込むようになるのですが、二人とも伝統俳句の基礎を大切にしながら、さらに多様な文化や人間の姿を深く問い、現代的な句の世界を拓こうとしていました。そして石原八束を継いだ文挾夫佐恵は九十九歳で蛇笏賞に輝きました。志を深く持ちながら、詩的世界は柔軟で自由でした。

さらに、私にとって有難かったのは、俳句の友人に恵まれたことです。学生時代からの友人もいます。皆、発想が自由で、いつも私はその大波小波を受けていました。これからも俳句に揺さぶられながら自分の世界を追い求めたいと思います。

（以上、現代俳句協会会員誌『現代俳句』九月号より転載）

【俳歴】

１９５６年、茨城県生まれ。「東大学生俳句会」を経て、石原八束の「秋」、及び有馬朗人の「天為」に入会。現在、「秋」主宰、「天為」特別同人。現代俳句協会副幹事長・広報部長、東京都区現代俳句協会副会長。専修大学文学部客員教授。句集は『意中の湖』『光塵』『青こだま』『楮の木』『悪食の獏』『天樹』『無二』の七冊。